叢書・知の分水嶺 1980'S

吉本隆明を〈読む〉

埴谷雄高◉樺山紘一◉谷川　雁
鮎川信夫◉鶴見俊輔◉桶谷秀昭
橋川文三◉奥野健男◉野村精一
磯谷　孝◉石尾芳久◉柄谷行人
森山公夫◉笠原芳光◉荒井　献
久米　博◉川上春雄

叢書・知の分水嶺 1980'S

吉本隆明を〈読む〉

現代企画室刊

叢書・知の分水嶺1980'S

gendaikikakushitsu

吉本隆明を〈読む〉

発行日——一九八〇年十月二〇日　初版第一刷
一九八五年三月二〇日　初版第三刷一〇〇〇部

定価——二〇〇〇円
著者——埴谷雄高ほか
装幀者——粟津潔
編集者——高橋徹・山名哲史
発行者——北川フラム
発行所——株式会社現代企画室
住所——東京都千代田区猿楽町二—二—五興新ビル302
電話——〇三—二九三—九五三九
振替——東京二—一一六〇一七
印刷——公人印刷株式会社
製本——中央精版印刷株式会社

0090-100006-1980

吉本隆明を〈読む〉

目次

序

吉本隆明における戦後——埴谷雄高——7
構造をめぐり、構造のむこうへ——樺山紘一——10

1 吉本像の諸相

決定的な転換期——埴谷雄高——23
庶民・吉本隆明——谷川　雁——29
吉本隆明私論——「マチウ書試論」まで——鮎川信夫——43
吉本隆明についての覚え書き——鶴見俊輔——65
拒絶のナショナリズム——桶谷秀昭——74
吉本像断片——橋川文三——91
自然科学者としての吉本隆明——奥野健男——94

2 『言語にとって美とはなにか』

表現としての言語——吉本隆明と時枝誠記の遭遇と交渉——野村精一——103
吉本詩学のメタ言語について——磯谷　孝——118

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

3 『共同幻想論』
支配の正当性と共同幻想——石尾芳久—143

4 『心的現象論序説』
孤独なる征覇——柄谷行人—167
〈思想的自立〉と〈心的領域の定立〉——森山公夫—171

5 宗教思想を媒介に
吉本隆明における聖書——笠原芳光—191
『最後の親鸞』考——荒井　献—210
『論註と喩』——久米　博—236

6 吉本隆明年譜——川上春雄—253

序

吉本思想の現在

吉本隆明氏の思想的営為が、近代日本に類例のないかたちで、われわれの前にあらわれてきていることは、疑いえない事実である。

ここに収録した、現在時点における吉本氏の思想についての素描は、二つの懸隔した世代の書き手による。一九一〇年生れの埴谷氏は、吉本氏の文学思想を早い時期に肯定した「近代文学」同人の一人であり、樺山紘一氏は一九四一年生れの歴史研究者である。樺山氏の視点には、旧世代が開拓した領野からの収穫を得たうえでの新しい知見がひらかれている。吉本氏の思想的現在を追う総括的な文章を、三〇年余り懸隔した二世代から、つまり吉本氏を上下にはさむ世代から見ようとした。

吉本隆明における戦後

埴谷雄高

与えられた時と所と自身のなかで、その与えられた時と所と自身へののっぴきならぬ違和感が私達の精神の目覚めの出発点であるけれども、とうてい拭い去りがたいその違和感と不思議にも拮抗しつづけてなお成長する或る種の全的な親和感の発見なしには、自己内面に頭を抬げるところの思想の緊密なかたちに私達はついに辿りつき得ないのである。いってみれば、或る矛盾の幅のなかではじめて思想は頭を抬げ、その矛盾の苦痛の幅が広ければ広いほど、それは自らの力で自らを大きくせざるを得ないのである。

戦後、廃墟のなかに立った多くの予言者や否定者に対する全的否定によって、私達のまったく予覚せぬ新しい観点と創見を打ち出し、思いがけぬ飛躍につぐ飛躍を重ねて、自己独自の思想に達したばかりでなく、文学、哲学、社会主義、宗教の枠を大きく越えてその対象を拡げに拡げつづけた吉本隆明は、深さと広さの自己実現へ向ってのみ進む思想本来の歩みゆくかたちを戦後ようやく私達の前に告示した観がある。

嘗て、私は、吉本隆明を「最後に来た人」また、「墓場から出てきた人」と呼び、「墓のなかから、戦争の大量な死のなかから甦ってきた彼には、死を知ってしまったものの不思議な無恐怖がある。」と述べたが、彼が、墓のなかから、戦争の大量死のなかから携えてきたものは、敢えていえば、精神の特攻性の深い、深い、底もない孤独、といったものである。幻の特攻機に乗った彼の眼下には、紺碧の大海が拡がりに拡がっており、彼が全身全霊をこめてそこにぶつかり炸裂し、いわば、大矛盾の止揚がそのときそこにおこなわれる筈の相手は、探しても探してもついに見つからぬまま、彼は「墓場」から「戦後」へ帰ってこなければな

らなかったのである。

ところで、そのとき、彼が直面せざるを得なかった新しい困難は、彼が携え帰ってきた精神の特攻性の孤独感の向う側に、思いもかけずまったくこと新しく、精神の共通性の親和感を、どうにか、また、どうしてでも、発見し、対置しなければならなくなったことである。それは、果てしもない紺碧の大海を眺めつけたものにとって、ほこりにまみれた薄暗い世界と向きあいながら、果てもない違和感につつまれつづけるその新しい大海のなかから何処かにあるまったく未知の親和感をとりだすべき大いなる矛盾の作業となったのである。吉本隆明がこの困難な課題、思想が本来もっているところの極度にかけ離れた両端にひき裂かれた広大な矛盾の課題に敢然と立ちむかって、この吾国の風土のなかでそれをついに解きに解きつづけたのは驚くべきことであるが、私達がより驚くべきことは、それがまさに精神の特攻性の孤独感の讃嘆すべき不屈な持続性によっておこなわれたということである。

というのも、戦後、現代の廃墟へ帰ってきたものの殆どすべては、精神の特攻性の孤独感を携え帰ってきたにもかかわらず、その核心の一点をその殆どすべてがまた日常のなかで時々刻々失いつくしたので、不屈な思想を支えるものこそはその不屈な一点の長い、長い持続にほかならぬということを吉本隆明ひとりのみが証明したからである。そのはじめにもおわりにも、精神の特攻性の孤独感のみありき、というのが、吉本隆明に附する今後の標語となるであろうが、それはまた、吾国においては、広い領域にわたる強力な思想の堅固な構築は、ひとりの人物の一種奇跡的な持続力なしにはとうていなしとげられぬというきびしい告示ともなるであろう。

私は、嘗て、なんら幻影のかけらももたぬ対象凝視力を備えた並はずれた卓抜さから眺めると、吉本隆明にはほかの殆どすべてのものが馬鹿に見えるのではあるまいかと危惧したが、その後、彼の詩に接しつづけると、私の危惧が誤りであると解ったのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

何ものをもおそれぬ核心をもって出発した筈の戦後の詩人たちがその内面の一点を徐々に失ったいまも、吉本隆明の詩の黒い活字の向うには、いわば紺碧の大海の暗い虚無がみてとれるのであった。このような、いわば、「与えられた時と所と自身」を越える一種の無限性と虚無が内面にかいまみられなければ、詩は詩であることはできないけれども、彼の詩の暗い底部から響いてくるものは、馬鹿が優れたことを述べ、悧巧が愚かしいことを言うことなど私達の生と文学において屢々あり得るとすべて知悉してしまっている一種充実した虚無の無気味な永劫音にほかならないのであった。このような暗く充実した虚無が、私達の詩から失われてからすでに久しい。

吉本隆明の出現と持続は、恐らくは、私達のいまだ知らなかったまったく新しい畏怖すべき何かのさらなる出現をも予覚させる。そうとすれば、大量死に直面した戦中も風化しゆく戦後も、長く遠い眼でみれば、なお無駄ではなかったと心底からいわねばならない。

構造をめぐり構造のむこうへ

樺山紘一

1

かつてある時代の日本で、マルクス主義はすべてにさきんじてまず、科学であった。資本主義は恐慌によって、自動的に崩壊するのだから、社会科学にはその解体の過程を、法則的な正確さで予言することが課されているとかんがえられた。この科学性こそが、マルクス主義を、ブルジョア近代科学からわかつ決定項なのだとも。

太平洋戦争ののち、わが国で自由化したマルクス主義研究において、資本主義没落解体の自然法則の解明という、自信のみなぎった科学志向が旺盛なのは、当然のことであった。なによりもマルクス主義は、客観的科学でなければならないと。

しかし、あるころから深刻な反省が、このマルクス主義にたいしてむけられはじめた。マルクス主義は、まず人間本性の回復でなければならぬ。階級社会において疎外された人間の本来の理知と欲求とを解放し、自己のとりもどしを語る哲学でなければならないと。階級社会の自動崩壊によってではなく、疎外を廃棄する人間的営為をささえることによって、歴史をとりもどすのだといわれた。客観的科学よりは、主観的人間性にもとづいた、自我の解放としてのマルクス主義が問題となる。それは、硬直した社会科学を拒み、ヒューマニズムに依拠した、世界の主体的獲得をめざすものだといわれもした。

マルクス主義に、客観的機械性ではなく、みずみずしい主体的人間性をかよわせようという、その主張は、しばしばマルクス本人の著作のうち、とりわけ初期の連作に注目することになった。『ドイツ・イデオロギー』、そしてなかでも『経済学哲学草稿』がテキストにえらばれた。その後者は、一九三二年にモスクワで初出版され、邦訳されたのは、もちろん戦後のことであった。そこには、人間の主体の意識を解放にむけて作動してゆこうとする、若々しいマルクスの自我がえがきだされている。

多くのひとびとが、マルクス主義を、この新鮮なヒューマニズムに託してかたった。ことによっては、当時決定的な影響力をふるった実存主義をマルクス主義にむすびつけようとする試みすら、となえられた。若きマルクスの研究が、マルクス主義に若い活力をあたえるものと信じられた。社会科学の居丈高な客観性から、社会の変革を主体的にになうべき主観性への転換が、真剣に議論の的となったのである。そしてそれをとおして、かつてはマルクスによって逆立ちさせられ、投棄されたといわれてきたヘーゲルの姿が、ふたたび迫真力をもって、近代世界をとらえる軸としてあらわれでた。それは、近代の理性を主体のこととしてひきうける哲学的立場をさししめしていた。

2

すでに周知に属するかもしれぬことについて、ながながと前おきをのべたのは、ほかでもない。一九五〇年代の末、吉本隆明が若きマルクスのなかに、ひろびろとした可能性をみいだし、ヘーゲルにまで論じおよんだのにはそれなりの背景があるということを、いいたかったまでのことだ。若きマルクスならぬ、若き吉本のさっそうたる雄姿にうたれたのは、わたしだけではなかったはずだ。そして、その地点にたって吉本は、日本前衛党の硬化した政治主義や客観主義に呪詛をなげつけ、マルクス主義のなかに、新しい世代をきずいたかにみえる。

すでに二〇年にちかい昔の、この状況をいまだに吉本はその大筋においてひきついでいる。すくなくとも当人はそのようにかんがえていることは、たしかだ。「エンゲルスよりもマルクスだ、マルクスに遡行するとさらにヘーゲルだというように遡行してどこまでゆくかわからない。ぼく自身もまさにそういう流れの中に彷徨している感じがします。その意味では日本の主体性唯物論者、〈マルクス主義者〉と少しも違わないような気がしてしようがないんです。」(『世界認識の方法』) たしかに吉本は、この二〇年間、マルクスやヘーゲルについての、そのような読みに依拠したうえで、かなりにきわどい状況的発言をくりかえしてきた。その意味では吉本は一貫した立場をまもっているといってよい。

だがしかし、さきの引用につづけて、こう断言しているところが、とりわけ重大なのではなかろうか。「ただ、主体性〈マルクス主義〉がヘーゲルまで遡行したら安心感が出来たということなんでしょうが、ぼくはちっとも安心感がでてこない。まだ彷徨している。」はたして、どのように彷徨しているのか。その彷徨はいつはじまったのか。

吉本自身ならば、不安な彷徨ははじめからあった、と答えるかもしれない。自分は、主体的マルクス主義にはいくつもの疑問をもっていたというだろう。それゆえに一貫しているのだとも。しかし、わたしのみるところ、吉本にも、いわば幸福な安心感の時代があったようにみえる。若きマルクスに依拠した若き吉本には、いまだ彷徨の苦渋はあらわれてはいなかったのではないか。六〇年安保の前後のかれには、それこそ主体的マルクス主義の活力がのりうつっているようにみえた。

もちろん、さまざまな理由や動機があろう。そのごの二〇年間のあいだに、吉本はいくえにも安心感をうしなってしまった。年齢のためなのか、あるいは日本社会の急激な変質によるのか。そしてまたは、マルクス主義をふくめた、人間・社会諸科学の状況が大きくうごいてきたためであろうか。鋭敏な思想的感受性をうしなわないかれは、それらのあたらしい状況にたいして、そのたびに応答をこころみながら、彷徨をかさ

ねてきた。

たとえば、構造主義という名で総称される世界認識の方式にたいして。その方式のひとつの可能なありかたとしての、M・フーコーにたいして、吉本はかなりな程度に共鳴をかんじている。もしかすると、フーコーの議論や予言はあたっているのかもしれないとすら考える。

しかし、そう容易に同意することができないのは、言うまでもないところであろう。というのも、構造主義の名でよばれる立場は、ほぼ共通にまず、世界認識における主体の地位につよく否定的だから。自我や主観の投影としての世界認識は、支持しようのない錯誤にほかならないのであって、近代の思想が独断的にうちたてた「人間」という架空の主体によってささえられているにすぎないと。構造とは、認識者の不動の温かみによってヒューマニスティックに構築されるのではなく、むしろ「人間」の主体的意志にかかわらずに実在するものである。それは、ときには意志に逆らって、またときには意識されない衝動にもとづいて。つまり、人間の主体的意思とはべつの領域に所属するものとして、ひとに命令する実体なのである。

もしかりに、このような「構造」の立場がなりたつとしよう。そうすると、かの主体的マルクス主義の立場は、正面から否認されざるをえまい。疎外からの回復といい、類的本質の展開といい、いずれにしても若いマルクスのなかに発見された、ヒューマニスティックな自我性、主体意識は、しょせんは近代思想の錯誤の遺産をひきついだものでしかないことになろう。ほとんど、主観的観念論とえらぶところなくなってしまうのではないか。

たしかに、「構造」の立場からのこのような批判にたいして、主体的マルクス主義のがわからは十分に反論ができていないようにみえる。というよりも、かつてすぐれた理論的生産力をしめしたその立場は、現在ではすでにほぼ活力をうしなってしまっているのだ。

それでははたして、ふたたび主体の意識にかわって、世界の客観的実体が主役におどりでてきたのであろ

うか。かつて、マルクス主義の名で科学を主張した、その立場が、いまや「構造」の名をかりて、またしても科学の支配権を主張するにいたったのだろうか。資本主義社会の自動的な崩壊、つまり、個の意識からへだたったところで生起する世界の現象のみが実在とみなされたように、こんどは資本主義のみならず、すべての世界現象に冷徹な構造が支配することになるのであろうか。時代はひとめぐりしたのであろうか。

しかし、わたしは「構造」の立場を、そうはかんがえていない。一般的な理解に反するかもしれないが、じつは、「構造」の立場の重要性はつぎのことにあるとおもう。すなわち、構造とは、客観性に属するか、主観性に属するか、と問うことのできないものである。そもそも、近代思想における、人間や自我や主体の認識論上の根拠をしりぞけたとき、構造主義は、その主観性と対になるかぎりでの客観性をも同時にしりぞけたはずである。もはや、客観性の王政復古はありえない。世界を客体と主体、外界と自我といった図式においてとりこむ認識方式全体を拒絶したのである。だから、客体一元論も、主体一元論も、そして主客二元論も、いずれも採用しないことを宣明したといわねばならない。それらしりぞけられる立場は、いずれにしても、ひとつ、またはふたつの実体をさだめ、他の実体への、またはふたつの実体相互の、機械的で直接的な作用を論ずるにとどまったのである。

構造主義は、客観や主観といったものが存在することは否定しないが、それはたんにひとつの現象としてのかぎりであり、それら現象はけっきょくは構造という第三のものへと投影されるものとみなす。そのかぎりでは構造実在論とでもいえる。その構造は、主体と客体とがともに発する共通の母胎であるばかりか、さまざまな人間現象が収束してゆく固い地盤でもある。

さて、この「構造」の立場に、吉本隆明はなにを問うであろうか。拒絶か黙殺か、それとも……。そして、マルクス主義にとっては……。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com